

郷土誌だより

いまむら

No. 3
 編集委員会
 今村誌編集委員会
 発行
 今村誌刊行会
 今瀬戸市平町3-142
 電話 (84) 0840
 コミュニティセンター内

郷土史家

戸田修二さんを囲む会

八月十二日、コミセンターで

今村誌編集委員会で去る八月十二日午前九時から、「日本城郭全集」などで知られる郷土史家、戸田修二先生に今村の歴史についていろいろご教示いただくこと、コミュニティセンターへ来ていただいて勉強会を開きました。

話題は、いろいろ伝えられていながら尚ほつきりしない点の多い松原下総守広長公関係を中心に進められましたが、さすがに専門家だけあってその広い知識と深い洞察力を駆使して語られるお話は説得力があり、委員たちから出される質問や疑問の一つ一つに適確に答えていかれる態度は真剣にして謙虚、しかも興味深い事例など引用して話されるのでつい予定時間を超過してしまい、昼食を共にしながら意義深い教時間をすごしました。

中でも、「立派な、お鶴屋敷が城郭外にあったということは大きな意味がある。恐らく、お鶴の方」というのは側室であって、正室は若くして他界され、そのあと、二

人の子をお鶴の方が精魂こめて養育されたのではあるまいかと思われるが、更に検討を重ねてみなければ断言は出来ない」という示唆に豊んだ話とか、「まだ発表できる段階ではないが、横山殿様についてある程度つきとめることができただ。今少し待ってもらいたい」といった発言は、注目されます。

また、話が瀬戸村にふれたとき「藤四郎についてもいろいろなことが言われている。中には知名な研究家がいいかげんことを言っているものもあるが、藤四郎は岩城主の息子ですよ。立派な武士で道元の用心棒のような立場で随行したのだ。もともと窯業の知識もあつたと思う。ただの工人が道元に従って入宋などできるわけもないだろう。これはいろいろな角度から裏付けられます」と言い切られた。(編集部註・岩村城は文治元年11一説建久六年11加藤景康が築いた)

話がまた今村にもどると、戸田氏は今村の旧家や人名をあげて、

今はどうなっているのかなどと質問される場面もあつたりして、たしかに自分の足でこまめに歩いて研究しておられるのだということに改めて認識させられました。聞きたいことはいっぱいあつて

ところが、予想をこえる多くの方々から私たちの仕事を知っていただくことが出来たばかりでなく、思はぬご教示やご協力を頂いたり、熱意あふれる数々の反応をお寄せいただきまして、一同深く感謝しております。

そこで、次号(第四号・十一月発行)から回覧方式をとりやめ、ご入用の方には無料でさしあげることに致しました。

その方法は、発行ごとに、次の各所へおねがいして沢山お届けしておきますので、もよりの所までご足労ねがいます。

回覧は今号限り 配布方法を 変更します

- 長根公民館
- 今村いこの家
- 効範小学校
- 効範公民館
- 東山小学校
- コミュニティセンター

この「郷土誌だより」は、私たち今村誌刊行会が現在進めております今村誌の編さんという仕事を広く地域の皆様に知って頂くとともに、皆様からいろいろご教示やご協力をいただくためのよすがにしたいという希いをこめて、情報交換の場として発刊したものです

が、当初、旧今村の全地区の皆様にもれなく知っていただくという気持から、効範・長根両連区自治会の温いご協力のもとに各町内へ回覧をお願いしてまいりました

すのでお受けとり下さい。

又、以上八ヶ所の関係者の皆様には大変お手数をおかけ致しまして申し訳ございませんがよろしくお願い申し上げます。

※お問合せは
 八二一四八四七 伊藤まで。

郷土芸能

今村の獅子芝居



黒の裾模様を着て、獅子頭を頭にのせ御幣と鈴を持って、笛太鼓のはやしや唄に合せて舞う神事舞踊。獅子が女形で主役となる獅子芝居、「阿波の鳴戸の子別れ」の場の、

巡礼にご報酬……くには、阿波の徳島。…ととさんの名は十郎兵衛。かかさまの名はおゆみと申します……

と可愛い巡礼の所作が今も目にうかぶ。四十代以上の地域の人々には昔懐かしい獅子芝居は、明治初年から大正を全盛期として、戦後の二十二、三年の頃、熱愛された加藤円太郎さんの世話で北脇の地蔵さんで行われた獅子芝居を最後に見ることもなくなった。

この獅子芝居は、尾張地方各地で行われたが、殊に海部郡篠田村の一座と、丹羽郡今市場村の一座が最も評判も高く優れていた。(現江南市今市場獅子保存会は、県の無形文化財に指定されている)この二座と今村は関係が深く、度々観せてもらって、今村の若い衆の間に獅子芝居のけいこがは

じまり、試演となり、やがて他村へ招かれるまでになった。その獅子連の人々の名が、古くから聞き出すことができた。

川南(市場、寺山)では、稲垣儀兵衛、鈴木庄大、鈴木林エ門、横山倉太郎(唄)青山喜三郎(〃)青山兼助(〃)青山松二郎(獅子舞)横山貞太郎(芝居)青山利エ門(芝居)

川北(北脇、川西)では、加藤岩三郎(唄)加藤定次郎(芝居)青山増五郎、伊藤彦太郎(獅子舞)矢野藤太郎(笛、リーダー)加藤円太郎、伊藤勘三郎(唄、はやし)矢野京一(獅子舞)矢野文五郎、鈴木九一郎、青山登一(芝居)矢野みい、横山チエ、加藤百合子(巡礼)

今村の獅子芝居をはじめられた先人の技を伝承する人が、時代の流れで生れなかつたので、今は思流出に残るのみとなった。使われな道具も今残っているのは、大小の太鼓と飾台のみとなった。太鼓の皮は破れているが、大太鼓の胴の内側に、「明治七年戊六月中旬

尾張国名護屋平野町、中埜小市良造」と墨痕鮮やかに記録されている。小太鼓の方の外側には、「寺山嶋獅子組」の文字が読取れる。獅子頭が青山松二郎さん宅(孫、裕保)に、昭和二十五年頃まで残っていたということである。残念なこと全盛期の道具が不明である。ただ矢野文五郎さん主演だった台本一冊が同家の仏壇の引出しに保存されていた「花雲佐倉」と表書きされ、裏に「今川獅子連」と記されている。

村の祭例の奉納行事は勿論、農閑期に小屋掛けして上演された。観客は村人だけでなく、招いたお

大きく変わったし尿の今昔

客も一緒に、お酒や弁当持参で楽しみ拍手と共に花(祝儀)を舞台に向つて投げることが常であった。この日のために獅子連の人々のけいこも激しかった。毎夜十二時、一時までも行われた。けいこ場も島の集会所や個人の家や小屋、庭等で行われ、そのけいこ風景をみる人も多かつたようである。

以上、中間報告をまとめるについで、伊藤憲二、矢野倉二、加藤つぎ、矢野孝美、加藤行治、小川錠太郎の、みなさんから貴重な資料の提供やら記憶を辿って頂きましたII (西寺山町 横山春一)

農業に下肥は、なくてはならぬものであった。昔といつても昭和三十年頃までは普通に見ることができた農家の便所は、家の外にあつて大小の二つに分れていた。出物の受け器も大きく溜ると汲出して、屋敷か畑の片隅につくつてある可成り大きな貯蔵溜に移し、腐るのを待つて使う。大の方は主に基肥に、小の方は追肥用としてう

すめて使つた。麦は下肥ととれるといわれていた。農家が商品作物をつくるようになってからは、下肥の需要が多くなり、明治の中頃には、大八車に肥樽をのせて町へ出掛けたものだった。農家が町の人に渡す代金はまちまちだった。都市は下肥の大生産地となつた商品価値をもつてきた下肥のねだんを調べ、きめてほしいの声に

えて、興農会(正しくは東部興農共同義会という)が、明治二十七年二月に設立された。瀬戸町を囲んで北は水野、高蔵寺、坂下まで西は旭、守山、志段味、南は幡山、長久手、日進、保見の各村々の農家二千余の会員があつた。初代会長は今村の青山四七さんだった。事務所は北脇町の現在の水野建具店のところにあつた。興農会が調

定した不浄(下肥)の価格は、一ケ年一人金五拾銭の定額とする。日雇・出稼者は一人参拾五銭。尚日雇入れの方は一人拾五銭と定められ、若し従来の不浄代金より高額になる場合は減額請求する。

一人というのは満十五才以上の者とする。不浄代金は六ヶ月分を前払いする等々の外、十数ヶ条が定められていた。がしかし大正時代になると農家の下肥を使うことが少くなる。瀬戸町の人口は益々増加したので、調定は崩れ出し、大正十五年には興農会は解消してしまつた。

不浄は無価値となつたが、永い間の縁から汲取りは続いた向もあり、時々農作物等の付け届けが例となつた。無償汲取りとなつて戦中、戦後の食糧難時代が過ぎ、二十六年頃には、農家では化学肥

料が更に普及したので、下肥の使用は少くなり汲取りに出掛けることが次第に減つたので、町ではし尿の処分に困るようになった。こんな事情から汲取り専門業が生れ二十九年前に「瀬戸衛生社」等の開業となった。オート三輪車に木製箱タンクを乗せて汲取りに廻り旭村、長久手、日進の村々に運んで農家に使ってもらふことになった。がこれも永續しなかつた。困つて廃坑に捨てたこともあつた。瀬戸市では、三十五年度に赤津にし尿処理場をつくり処理が出来るようにした。当時市民は汲取り料として、肥樽一本につき三十五円位、直接業者に支払つた。

理処及び清掃に関する法律という市町村に原則として、し尿処理業務が義務づけられることになった。市では汲取り運搬業務は委託方法を選び、処理場は直営で行われることになった。この頃から水洗便所が普及しはじめた。現在市の委託業者は、愛知衛生社、尾東衛生社、品野衛生社の三社である。汲取り料は市条例で定められ、現在は一般家庭は定額制で、世帯月額一五〇円、人頭割一人月額一九二円となつてゐる。したがつて、二人家族だと五三四円になる。事業所等は従量制である。市のし尿処理に要する経費は、直営の処理場分が年額約一億五千万円、汲取り料収入が年間約二億円で、同額が委託料として三社に支払われる。

(市場町 鈴木藤一)

忘れた頃にやってきました

尾張地方の天災地変

このところ、東海大地震が来る

みました。

のではないかというのでいろいろ取沙汰されておりますが、天災は忘れた頃に果してやつて来たかどうか……大雑把にちよつと調べて

三百人牛馬一千頭が死に寺院堂塔十九ヶ所がこわされたという。それから四百年余りたつて南北朝幕開け時代の暦応元年(一三三八)九月、東国めぐらしていた筈の義良親王という人が大嵐に遭つて尾張国篠島へ流れついたといわれていますので、今で言う台風にやられたのでしよう。

さて、それから更に五百年余りたつて安政二年(一八五五)これ又台風が来て、当時盛んに進められていた伊勢湾沿岸の新田開発干拓地で百ヶ所近い堤防がこわされてしまいました。その大嵐から六年後の万延二年二月十三日、夜半から未明にかけて三河から飛驒に及ぶ広い地域に烈しい地震があつたと記録されていますが被害等は判りません。

そして、それからちよつと三十年後の明治二四年十月二十八日、かの有名な「濃尾大地震」となるわけです。この地震自体のデータは詳しく残っています。

発震時は十月二十八日午前六時三分、震源地は揖斐川上流、震域は

がこの濃尾地震に於ける今村地区(当時八白村)の被害等について詳しい資料がありません。どなたか、ごさいませんか。前述の災害誌によれば、八白村の住家全壊二戸、半壊四戸、破損四戸、非住家全壊一むね、半壊十五むね、破損三むね、となつていますが、あれから今年で八八年目。まあなるべく来てほしくないものですが、用心するにこしたことはないでしょう。

(青山隆弘)

シウジガネと横山街道



西山町にある廃棄物埋立場は、もと、シウジガネと呼ばれる池でした。この池は松原広長公時代すでにあつたもので、広長公は自ら先頭に立つてモッコをかつぎ、

村人を指揮して洲止め工事を行い治山治水に力をつくされたので、それまで水に難儀をしていた農民は大いに救われました。このあたり、瀬戸の北側をめぐる山なみがちよつと終る所で、山の根つこの鼻(端)というところから根の鼻から山の南側斜面に、ちよつと今の自然歩道にみるような段々の道が伸び、現在の南山センター附近から少年院あたりを抜け遠く美濃へと通つていました。昔は車というものがなかつたので段々道でよかつたが、大八車が登場すると具合が悪くなり、平坦な道が求められました。そこで今度は道路工事が始まるのですが、その道のことを横山街道といつていたよつで、旧瀬戸街道はその後作られた道だと古者は伝えてあります。

「横山街道、根ノ鼻、今、新居トノサカイノトオリニテ其東ニハ美濃カヨイノ紺田馬ノ立場アリ、往昔因定忠治宿リタル由伝説アリ」

因定忠治が出てきたのには驚きました。この道が中馬街道の一つであつたことは間違いないようつで、西山町下の辻には胴体が真二つに折れた馬頭観音石像が今もひっそりと佇んでいます。(A)

「連載」

広長公物語

(3)



一、はじめに (3)

広長公の慰霊、顕徳の外、伝説や遺跡は、瀬戸市内は勿論、近隣の豊田市、多治見市、春日井市、尾張旭市等所々にある。

中でも、瀬戸市塩草町の太子山萬徳寺(真宗高田派)は山号の示す様に、東海地方に数少い、聖徳太子像を安置する古刹として有名である。

此の萬徳寺は、広長公の菩提寺で、公の首塚(松原塚)がある。又広長公に関係ある、文化財的遺品の数々は、人皆周知の事である。之等に就て詳述しなければならぬが、単なる列記は、一知半解の謬をまねがれぬので、段章を改める事にして、先を進めます。

今回は、今村城跡附近の鎮魂、顕彰の経過を述べて、前書の結びとします。

ここに一つの興味あるエピソードを紹介したい。

安藤政二郎著「瀬戸とところどころ

の四十五円を基にして、今村の人々の寄附も加え、大正四年十

一月、大正天皇御即位、御大典の記念を併せて、広長公顕彰碑は造立された。現在八王子神社本殿の西の碑がこれである。(註1)

碑文の中で看過出来ない事は、「領民公を失う事慈母を失うが如く哀惜して息まず、文明十八年九月二十一日相謀りて、松原神社を八王子神社西北端の城跡に建て、而して以つて其徳を頌す、明治九年四月石社を以つて本社を易へ而して益尊崇の意を表す云々」と。

余談になるが、筆者の感を許さるたい。碑文というものは、最大の讃詞を重ねて書かれるのが通常であるが、此の碑文に於て、文明十八年というの、広長公敗れて四年後の事で、当時は所謂乱世、群盗、夜盗の横行、収奪の中にあつて、明日の生活も、命すら保証されぬまま、顕界に広長公を失つた領民達の悲嘆がいかに大きかつたか、広長公が今村城主として生きていたらなあ!と云う想いは、誰の心にもあつたと思われる。

さて話を元に返し、此の建碑と同時に、石造の松原神社は現在地(碑の右側)に移転祭祀された。

当時の思い出話を古老(註2)から聞いた。

当時、八王子神社の境内は、赤

松の太木八本、大杉二本、栃、楠、椿等の太木数本、其外雑木の茂つた原生的な森で、東側(現在の稲荷社のあたり)は、大きな竹藪であつた。

移社、建碑と同時に、市場、樋口、川西の諸社が八王子神社内に撰社として、合祀され、森は整備された。

当時は、今村挙げての盛大な祭で、献馬が出る、餅を搗く、家々では近在の親戚をよんで振舞う等々、子供達には紅白の饅頭が配られ、小学校からオルガンを借り出して、伊藤浜吉先生作詞の歌声が高らかに響いた。

「歴史は遠き四百年、足利乱世のその昔、城を築きて我が里の、礎置きし広長公」

次に、昭和十年四月御典医矢野知久恵の末裔である矢野京一氏によつて、「松原広長公城跡」の石標が造立された。(前回写真)(註1)

続いて、昭和四十四年十一月、志ある人達が集い、堀の一部を池として改修し「松原下総守広長公旧蹟お堀の趾」「お鶴井戸」の二基を石に刻して残した。

「今村」名付の親、広長公の顕徳と、鎮魂の為、此の社祠が、碑

が、池が……領民を思う、ヒューマニスト広長公を偲ぶ。

現在も、これから先も、今村の地域に住む者、長根、效範の連区の人々の血潮の中に通つている。

(白水郎)

(註1) 万徳寺広長公五〇〇年忌記念誌、(註2) 三宅寛一、横山春一、寺山同志会諸氏の談話。

次、昭和三十四年四月御典医矢野知久恵の末裔である矢野京一氏によつて、「松原広長公城跡」の石標が造立された。(前回写真)(註1)

続いて、昭和四十四年十一月、志ある人達が集い、堀の一部を池として改修し「松原下総守広長公旧蹟お堀の趾」「お鶴井戸」の二基を石に刻して残した。

「今村」名付の親、広長公の顕徳と、鎮魂の為、此の社祠が、碑

が、池が……領民を思う、ヒューマニスト広長公を偲ぶ。

現在も、これから先も、今村の地域に住む者、長根、效範の連区の人々の血潮の中に通つている。

(白水郎)

(註1) 万徳寺広長公五〇〇年忌記念誌、(註2) 三宅寛一、横山春一、寺山同志会諸氏の談話。

次、昭和三十四年四月御典医矢野知久恵の末裔である矢野京一氏によつて、「松原広長公城跡」の石標が造立された。(前回写真)(註1)

続いて、昭和四十四年十一月、志ある人達が集い、堀の一部を池として改修し「松原下総守広長公旧蹟お堀の趾」「お鶴井戸」の二基を石に刻して残した。

「今村」名付の親、広長公の顕徳と、鎮魂の為、此の社祠が、碑

が、池が……領民を思う、ヒューマニスト広長公を偲ぶ。

現在も、これから先も、今村の地域に住む者、長根、效範の連区の人々の血潮の中に通つている。

(白水郎)

(註1) 万徳寺広長公五〇〇年忌記念誌、(註2) 三宅寛一、横山春一、寺山同志会諸氏の談話。

次、昭和三十四年四月御典医矢野知久恵の末裔である矢野京一氏によつて、「松原広長公城跡」の石標が造立された。(前回写真)(註1)

続いて、昭和四十四年十一月、志ある人達が集い、堀の一部を池として改修し「松原下総守広長公旧蹟お堀の趾」「お鶴井戸」の二基を石に刻して残した。

「今村」名付の親、広長公の顕徳と、鎮魂の為、此の社祠が、碑



ご協力深謝

次の皆さんから貴重な資料をお貸し頂きました。(敬称略)

伊藤武雄 宮里町二 一、二点
大瀬戸新聞社 陶生町 六、七点
水野 稠 山手町 二点
矢野孝美 平町三 一点